

第7号様式 (規程別表第1 第2項第2号ニ関係)



出張報告書

令和7年12月2日

尼崎市議会議長 様

会派名 無所属
代表者氏名 新田 真緒
出張者氏名 新田 真緒

このたび、出張しましたので、次のとおり報告します。

1 出張期間 令和7年11月5日から令和7年11月7日まで

2 結果の概要

用務先	報告事項 (この欄には要点を箇条書きにし詳細事項がある場合は別紙添付) 1 空き家対策について 2 多世代交流拠点・景丘の家について 3 子育て関連施設「AGECOCO」の運営・取組みについて 4 観光施策と産業活性化について 5 ユースセンターの運営・内容について	
添付書類 ☒ 視察報告書 ☐ ☐ ☐	備考	

3 届出事項の変更等 ☒ なし ☐ あり (内容は裏面に記載)

旅費の精算

☒ 精算額は、令和7年10月27日届け出た額 (77,202 円) と同一額である。

☐ 届出事項の変更等により、別途精算する。(精算額は裏面に記載)

(裏面)

届出事項の変更等の内容

変更等の事項と理由

支 出 額	
精 算 額	
支出 差引 額 戻入	

変更前と後の日程

月	日	日	日	日	日	日	日
前 発着地							
後							
前 経 路							
後							
前 用務先							
後							
前 宿泊先							
後							

視察報告書

日時 2025年11月5日～11月7日

出張者 鷲田 真緒
報告者 鷲田 真緒

鷲田 真緒
鷲田 真緒

視察テーマ 空き家対策について

視察先 東京都世田谷区

世田谷区では、住宅数の増加や人口動態の変化に伴い、空き家の総数が年々増加傾向にあります。特に老朽化した空き家の割合が高く、倒壊や衛生面でのリスク、景観悪化などが課題となっています。尼崎市においても、戦後の住宅開発が進んだ地域や高齢化が進行する地域を中心に空き家が増加しており、同様の課題が顕在化している状況です。尼崎市でも建築指導部門や不動産団体と連携した相談体制はあるが、世田谷区は専門団体との協定締結や伴走支援まで踏み込んだ点が特徴であり、より包括的なサポートが実現しています。特に今回注目したい取り組みが、「世田谷空き家活用ナビ」です。これは空き家所有者・近隣住民・相続人に対して、空き家に関する基礎知識、行政手続きの流れ、活用方法（賃貸・売却・地域利用など）、専門相談の窓口、費用・助成制度の情報などを分かりやすくオンラインで提供する総合サイトであり、相談窓口と連動している点が大きな特徴である。所有者が遠方に住んでいるケースや、相続人が複数いるケースでもアクセスしやすく、「まず情報を届ける」という点で大きな役割を果たしていると感じました。尼崎市においても、総合的な“空き家ポータル”の整備は今後必要になると感じた。情報発信の一元化は、相談件数の増加や問題の早期発見につながり、行政負担の軽減にも寄与する。世田谷区のような活用ナビの仕組みは、尼崎市でも実装可能性が高いと考えます。

総じて、世田谷区の取り組みは、尼崎市と問題構造が近いからこそ示唆が多いと感じました。危険度評価、相談支援、民間連携、情報発信、そして空き家活用ナビによる“所有者へのアプローチの強化”は、尼崎市の空き家対策を進める上で重要な視点です。今後の政策提案へつなげていきます。

視察テーマ 多世代交流、地域拠点、居場所づくりについて

視察先 景丘の家（東京都渋谷区）

「景丘の家」は、渋谷区が整備した多世代交流型の地域コミュニティ拠点です。子どもから高齢者まで、あらゆる年代の区民が立ち寄り、学び・遊び・相談ができる“みんなの居

場所”として運営されています。建物は地上3階・地下1階で、木質を活かした温かみのある設計が特徴です。地域住民の孤立防止や子育て家庭の支援を目的とし、区が積極的に民間団体と連携しながら運営しています。建物緒維持管理などは渋谷区の社協が担っています。尼崎市の既存拠点（子ども食堂、地域総合センター、オレンジカフェなど）とも方向性が重なるため、景丘の家のノウハウは十分に参考になると感じました。特に、「インクルーシブ」「多世代」「地域交流」を一体で運営するモデルは、尼崎でも導入可能なポイントが多くあります。その一方で、施設利用者の中でどの程度多世代交流を希望されているのか、施設運営側や行政側の期待の押し売りになることがないようにという気づきもありました。スタッフの確保、ボランティアスタッフの関わり方、また利用者間同士の関係についての運営上の課題は尼崎市の他の施設運営にも通じます。協働、共創社会のなかで今どのような多世代交流、多世代コミュニティを運営できるのか思索していきたいです。

視察テーマ 子育て関連施設の運営・取組みについて
視察先 「AGECOCO」（埼玉県上尾市）

本市における子育て支援体制の充実、子育て世代の転入・定住促進、多機能型の子育て総合拠点の在り方を検討するため、上尾市が整備・運営する「AGECOCO」について視察を行いました。AGECOCOは、妊娠期から子育て期までを切れ目なく支援する総合施設であり、母子保健、相談支援、発達支援、親子交流の場を一体的に提供しています。施設内には遊び場、相談室、多目的スペースなどが整備され、利用者は“ここに来れば子育ての相談・交流がすべて完結する”と感じられるワンストップ拠点となっています。主な取り組み内容は、切れ目のない支援体制・親子の交流拠点としての機能、・五感を育む教育・インクルーシブ遊具の推進・民間との連携による子育て環境の拡充などです。特に、上尾市には公立幼稚園が存在せず、保育・教育の大部分を民間と連携して実施しています。行政の役割を「支援の仕組みづくり・環境整備」に集中させ、民間の柔軟性・多様性を活かして子育て環境を充実させている点が特徴的です。現状の課題は、利用者増加に伴う混雑、専門職確保、発達相談の増加等、人的・財源的負担が課題となっており、持続的な運営体制の構築が求められていることと感じました。上尾市は近年、子育て世代の転入が顕著に増加しています。この背景には、AGECOCOをはじめとした子育て支援拠点の充実、五感教育やインクルーシブ遊具などの先進的な教育環境、そして民間との強固な連携による柔軟な子育て支援が挙げられます。本市が掲げる「子育て世代の転入・定住促進」において、上尾市の取り組みは多くの示唆を与えるものです。特に、ワンストップ型の子育て総合拠点の整備・インクルーシブな遊び・

学びの環境づくり・民間事業者との連携強化・親子の交流・相談が自然に生まれる空間設計は、本市においても導入・強化が検討されるべきポイントであると考えます。AGECOCOは、子育て家庭のニーズに丁寧に寄り添うだけでなく、市全体の魅力向上と人口動態にも寄与する重要な施設となっていました。子育て施策は「支援」だけでなく「まちの価値を高める投資」であることを再認識しました。尼崎市においても、子育て世代が安心して暮らせる環境づくりを一層推進していく必要があると感じています。

視察テーマ 葛飾北斎を中心とした観光施策と産業活性化について

視察先 東京都墨田区

本視察では、墨田区が推進する観光政策と産業活性化の取り組みについて調査し、本市におけるまちづくりの参考とすることを目的としました。

地域特性と観光の位置づけ 墨田区は、江戸時代から続くものづくりの集積地であり、中小・零細企業が多数を占め、化学工業を含む多様な製造業が発展してきました。この構造は、本市尼崎市と極めて類似しており、工場群と住宅地が混在する市街地構造、下町文化、地域産業への誇りなど共通点が多く見られます。墨田区は観光を「地域産業を成長させる新たなエンジン」と位置づけ、産業振興と観光を一体で捉える政策を展開しています。観光を単なる交流人口増だけでなく、区内企業に利益が還元され、ブランド力を高める仕組みとして活用している点が特徴です。

スカイツリー誘致による転換点 墨田区の観光施策における大きな転機は、東京スカイツリーの誘致にあります。スカイツリー建設地は元々、工場跡地であり、産業構造の変化に伴い生まれた土地を観光資源として再構築した事例です。スカイツリー開業後、観光客が飛躍的に増加し、飲食・宿泊・商業の新規投資が進み、周辺エリアの価値が大きく向上しました。しかし、墨田区は大型観光施設だけに頼ることなく、地場産業の歴史や職人文化を観光コンテンツ化し、地域全体の魅力向上につなげています。この点は、尼崎市における工場跡地の利活用、また“産業の歴史をまちの価値に転化する”という視点に大いに参考となります。

ものづくり観光と産業振興 墨田区は「すみだモダン」認証制度を設け、伝統技術や新たなデザインを用いた商品をブランド化し、観光と連動させています。また、工場や職人の現場を訪ねる「ものづくり観光」を積極的に推進しており、観光客を産業振興へとつなげる好循環を生み出しています。これらの施策は、製造業が多い尼崎市においても応用可能であり、地域資源としてもものづくりを再評価する契機となります。尼崎市が実施している「尼みやげ認証制度」のブランド

力の工場にも参考になると感じました。

墨田イノベーションコア 視察では、スタートアップ支援拠点「墨田イノベーションコア」にも注目しました。同施設は、区内製造業の技術を活かした新産業創出、企業同士のマッチング、研究開発の促進を目的として運営されています。オープンイノベーションの場として、若手起業家・デザイナー・中小企業の技術者が交流し、製品開発につながる事例が多数生まれています。

老舗企業と新興企業が協働し、地域産業に新しい価値を生み出す取り組みは、尼崎市にも必要な視点です。本市も多様な技術を有する企業が多数存在しており、交流拠点の整備・支援は産業活性化に直結すると考えます。

まとめとして、墨田区の観光と産業の連携は、「歴史あるものづくりの価値を再解釈し、観光資源化し、地域経済の循環につなげる」点に大きな強みがあります。本市においても、製造業の歴史や工場跡地の利活用、観光の位置づけを再整理し、産業と観光の融合を図ることで、地域ブランドの向上と定住・交流人口の増加につながると考えます。

視察テーマ ユースセンターの運営・運営内容について

視察先 NPO法人育て上げネット（東京都立川市）

本視察では、立川市における子ども・若者支援の中核拠点であるユース交流センターと、地域の子育て家庭を幅広く支えるNPO法人育て上げネットの取組について学びました。両施設は、児童・生徒から若者、保護者、また中高年層までも含めて切れ目なく支援する包括的な仕組みを整備している点が大きな特徴です。人口規模や都市構造、都市のイメージが類似する尼崎市にとっても、多くの示唆を得るものでした。図らずに多世代交流の拠点にもなっているとも感じました。

同法人が運営するセンターは、中高生や若者の「居場所」機能に重点を置き、勉強・交流・相談の各スペースを柔軟に配置しています。特に、不登校や生きづらさを抱える若者に対して専門相談員が常駐し、学校と連携しながら段階的な社会参加を促す仕組みが整えられていました。立川市ではこのセンターを「若者の成長支援と社会的自立の触媒」と位置づけており、単なる余暇施設にとどまらない役割を果たしている点が印象的でした。これは同法人が就労支援をすることを目的として活動されていたことも大きな要因です。

立川市の取組で特徴的だったのは、若者支援と子育て支援を「段差なくつなぐ」運営方針です。家庭の悩み、学校の悩み、生きづらさ、将来への不安など、ライフステージごとに異なる課題を複数の部署が縦割りで扱うのではなく、横断的な支援体制を構築していることが成果を生んでいました。この姿勢は、尼崎市においても、不登校支援、ユースセンター構想、地域子育て支援の強化が続く中で大いに参考になる点

です。

今回の視察を通して、若者・子育て支援の拠点機能を明確にし、専門性と居場所性を両立させることが、利用する当事者にとって安心感と信頼につながることを改めて実感しました。尼崎市でも、地域の実情に応じた“つながりのハブ”としての拠点づくりを進める際に、立川市のモデルは非常に有益であると考えます。今回直接の視察は日程でかないませんでしたが、夜のユースセンターについて実施内容や実施するに至った経緯、現状の課題について学ぶことができました。育て上げネットの夜のユースセンターは、社会から孤立しがちな若者たちにとって“誰かが待っている場所”“安心できる居場所”を提供する新しい支援モデルです。昼間の支援だけでは届きづらい層にアクセスし、社会とのつながりを再構築する可能性を示しています。

尼崎市においても、子ども・子育て支援、教育支援に加えて、若者支援の観点からこのような拠点を検討することで、若年層の安心と地域の将来につながる支援基盤を整えることができると考えます。